



# 牝神のクーポン

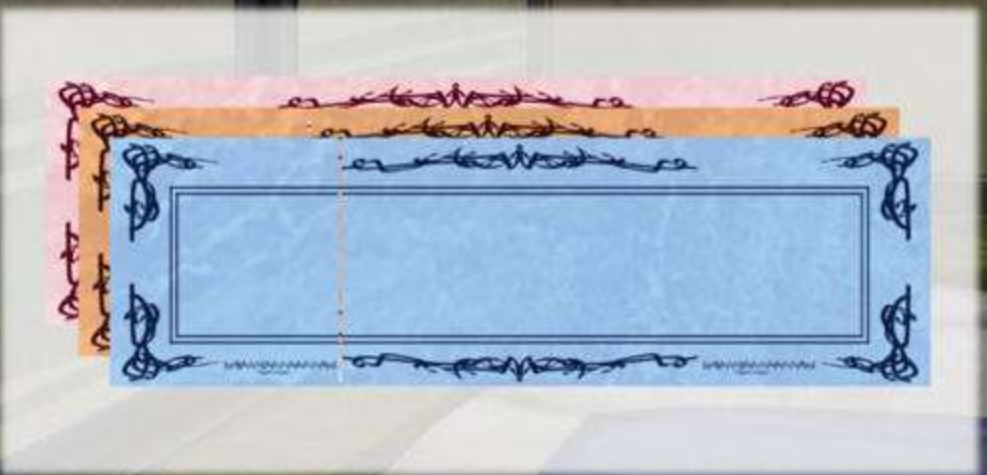
清纯派アイドルを变态痴女に生まれ変わらせるお話



俺は今年で40歳を迎える独身男だ。  
しかも、生まれてこのかた女と付き合った事はなく未だ童貞だった。  
趣味といえばオナニーくらいなもの、  
自慢ではないが今でも毎日欠かさず2回以上シッコっている。  
傍から見れば……いや、自分でも  
あまり健全とは言えない毎日。  
だがそんな俺に転機が訪れる。

数日前、  
いつものようにグラビア雑誌でオナニーをしていた俺の前に  
突然、見知らぬ女が現れたのだ。

彼女は性の牝神(めがみ)アフロなことが――  
よく覚えていないので、アフロさんと呼ぶ)と名乗り、  
オナニー皆勤30周年記念の粗品をプレゼントしてくれたのである。



それは彼女曰くどんな願いでも叶う

『牝神のクーポン』らしいのだが見た感じそんな風には見えない。

それでも、せっかくだから買ったのだし使ってみる事にした。



試しに使ってみたのは青のクーポンだった。  
これは性格や能力、習慣などをあたかも  
最初からそうであったかのように変化させる事が出来る代物だそうだった。  
使い方は単純、該当する望みを書いて半券を切るだけである。

そんな訳で俺は、幾つが叶いそうもない内容を書き出してみた。

すると、結果は予想に反し素晴らしいものだった。  
何回オナニーしても息子はまるで衰える様子はなく  
そのつど漫画顔負けのザーメンをぶち撒ける事が出来る。  
さすがの俺も余りの変わりように不安になったが、  
アフロさんが言うには、これが俺にとっての  
常識になっただけなのでデメリットはないそうだった。

すなわち、何を書こうが心配する必要はないのである。



『これなら、好きな相手で童貞を捨てる事が出来そうだな……』

俺は1人の女の顔を思い浮かべた。  
彼女の名は新田美波。  
今まさに売出し中のJDアイドルである。

もっともこの女とは少し縁があり  
以前俺が住んでいたアパートの前が美波の通学路だったのだ。  
そのため、通りがかる彼女を眺めながら  
毎日のようにオナニーに励んでいたものである。

一度、シッコっている姿をモロに見られて逃げられた事もあったがな……



そして、先日のよんなんさんから  
仕事の都合で立ち寄った店で  
彼女と鉢合わせになったのだ。

俺は懐かしさのあまり思わず声を掛けてみた。

「突然だと覚えてるのかな？」

俺、以前美波ちやんの近所に住んでいた……」

「覚えてますけど……申し訳ありませんが、

あなたとお話する事は何もありません……」

だが、結果は最悪だった。





やはり、オナニーを見せつけた事を根に持っていているのだろうか？

いや、そこはジコってくれる男がいる事を  
光栄に思うのが筋というものである。

『ならば、俺が手を貸してやるとするか……』

そうこのクローポンさえあれば全てが思いのままなのだ。

『すぐに男を悦ばせる事しがり取り柄のない変態女にしてやるぜ。』

そして俺も童貞を捨てさせてもらうからな。くっくっ。』

俺はあの女の破廉恥な姿を想像しながら胸と股間を熱くするのである。































その夜、俺は美波を部屋へ呼ぶため**赤のクーポン**を使う事にした。  
これは、シチュエーションヨツを含めた行動を全て操作する事が可能だが  
半券を切り離さず、任意のタイミツグまで効果が持続させると  
いった使い方もできる。

## 美波は俺の部屋に来る

### 裏面(補足事項)

①部屋に来るタイミングは美波の就寝後  
であり、移動は自覚なく行われる

以下、この部屋でのルール

- ②俺の頼みを断る事は出来ない。
- ③記憶は部屋から出た時点で一旦消去される
- ④これ以外のクーポンを使用した際に付随  
する記憶も効果が終了すると一旦消去される
- ⑤身に付けた習慣や性癖(他のクーポン起因  
含む)は無自覚のまま維持される
- ⑥このクーポンが効力を失った場合  
補足②③④は破棄され、補足⑤は  
彼女にとって一般的な常識に置き換わる

また、補足を加える事で細かく条件をつけるなど自由度は高く  
**青のクーポン**同様、俺の不利益になる状況にはならないので  
あとは大船に乗った気分て彼女が来るのを待つだけであった。



……トントン

暫くすると美波が俺の部屋にやって来た。

まだ無自覚のままのようでありアクションはなかったが、俺に促されると中へと入ってくる。

「……自分で仕組んだ事とは言え、あの新田美波が俺の部屋に居るってのは格別な気分だぜ。何だかんだ言っって、さんざんスリネタにした女だからな、うひひっ」

俺は鼻の下を伸ばしながら暫く美波の顔を眺めたり匂いを嗅いだりしていた。





『……え？ マジは？』  
その時、美波は我に返った。

『やあ、いらっしやい。』  
『どうだい？ 俺の部屋に来た感想は？』  
『……うそ……どうして？』

彼女は何度も瞬きを繰り返すと  
部屋の中を見渡していた。

おそらく記憶にあるのは  
眠りについた時までであるうから  
その反応は無理もない話である。

『……私、夢でも見てるの……？』

そして、俺を前にしながらも戸惑うばかりで  
先目のような毅然とした態度が取れないのは  
クーポンの力によって俺が守られている  
からだだろう。

『じゃあ、さっすくはじめるとするか』



『まずはこれだな』  
俺はあらかじめ用意しておいた  
橙のクーパーンを切り取ると  
美波に差し出した。

これは基本的に赤のクーパーンと  
同じ効果を有するが、大きく異なるのは  
結果を過去に遡って反映させる事が  
出来るという点であった。  
すなわちこれから彼女は  
自らの手で過去を塗り替えていくのだ。

『えっ!? は、裸!?  
からかわないてください!……!』  
そんな事を知る由もない美波は  
常軌を逸した内容に  
ただ驚くばかりだった。

『わ、私……帰りますから……  
……っ!?』

『……っ、嘘でしょ?』  
だがクーパーンの力に抗えるはずもなく  
彼女は自らシャツに手をかけると  
服を脱ぎはじめる。

俺がガン見しているにも関わらずだ。

## 美波は全裸になって オナニーをはじめる

裏面(補足事項)

- ① 2回イクまで途中で止める事は出来ない
- ② ズリネタは俺の体臭とチンポ
- ③ 結果は過去5年分の日課として記憶と経験に蓄積される



『そんなめ、止まってるえ……』  
生まれたままの姿になった美波はカビ臭い布団に腰を下ろすと大きく股を広げ、縦部に指を触れた。

『ふふ、これから何を始めるんだ？』  
『……は、はい、オナニー……です、ひっ……』  
（うう、そんな事……したくないのに……）

『アイドルの美波ちゃんは普段もオナニーしてるのかな？』  
『そ、そんな事しません……』

『あ、いえ……週に2回くらい……しています』  
（いやあ、言っちゃダメえ……）  
質問を拒む事が出来ず美波は悔しそうに答えた。

くちゅ  
ちゅわん

『ふふ、アイドルなのにエッチなんだねえ』  
ネットなどでは卑猥な書き込みやアイコラなどの標的にされる事の多い彼女だったが、こう見ると、あながち的外れとは言えない性欲であるう。



『じゃあ、何をオカズにオナニーしてるんだい？』  
『……そ、それは……』

（ダメよ美波……耐えるの、それは言っちゃダメ……）  
『じ、事務所のプロデューサーさん……です……』  
耐える事も叶わず本心を赤裸々に吐露する美波。

『もしかして身体の関係もあったりするの？』

『いいえ……わ、私……処女なので……』

（ひっ……そんな事まで言わないで……）

まさか、週に2回もオナニーを嗜むような女が

処女だとは予想外の収穫であろう。

そして、俺の計画にもいっそう力が入るといっもののである。

きゅっ  
くちゅ

『ふふ、それじゃあ今は何を思いながら  
オナニーしてるのかな？』

『……うう、あなたの……匂いと……ち、チンポです』  
（うう、あなたなんか興味ないのに……）

『嬉しい話だな。なら、俺でオナってる

変態アイドルの姿を特等席で拝見するでしょう』

俺は美波にプレッシャーをかけるべく、

横部をはっきりと凝視できる位置まで距離を詰めた。



『はぁぁん……み、見ないでえ……』  
（ああ……そんなに強く弄ったら……  
身体が熱く……うう）  
美波は俺の視線に苛まれながらも  
ただひたすら臀部を弄るしかなかった。

すー  
はー  
ぬちゅ  
ぬちゅ

『……くんかくんか、すーはー』  
もちろん俺の体臭を嗅ぐ事も忘れない。  
こうやって絶頂を迎えるのが、  
今の彼女にとって絶対的な使命だからである。

『くく、俺の匂いはどうだ？』  
『……そ、それは……く、臭いです……』  
『でも、おマンコがだんだん  
気持ち良くなってきます……』  
事実、臀部は湿り気を帯びると  
卑猥な肉のメロディを奏ではじめていた。



『はあはあはあ……あめん……』  
（……うう、止まってえ……）  
このままじゃ……ホントに……』

ぷんぷん

ビクッ  
ビクッ

『ひめ……うらめっ……いイクっ……』

こうして美波は情けない声を上げながら  
俺の体具をオカズに最初の絶頂を迎えた。

『あめん、み、見ないでえ……』  
そんな彼女を祝福するかのように  
緋部からは潮が噴き上がると  
淫らさと情けなさを際立たせるのだ。



(なら、今度はチンポを挿ませてやるとするか)  
俺は美波に跨ると  
その端正な顔に肉棒を押しつけるような体勢を取った。

「ひっ……うっ？」  
(なんて太くて長いの……弟と全然違う……)  
うっ、あんまり並べないで……)

ひっ…

ぬちゃ  
ぬちゃ

それでも彼女の視線は男根に釘付けであり  
いったばかりにも関わらず、  
指は貪るように縦部を弄っていた。

(やはり実物が目の前にあると挿り方が違うようだな)











「ひっ、いイクっ」  
（うう、精子かけられただけなのに……）

美波は全身に電流が走ったかのように震えながら  
何度も絶頂を繰り返した。

がっ

んんん

びん

びん





『……はあはあ』  
『やっと終わった……もうイクのは嫌……』  
『ようやくオナニー地獄から解放される美波。』

『……あ、あれ？ わ、私……いったい何をしてたの？』  
『さ、これって男の人の……ひっ……』  
同時にそれはクーポンによる過去の改変が行われた事を意味していたが、今の彼女にそれを知る術はないのである。

ほー  
ほー

ドロッ







































（さて、そろそろだな）

俺は美波が落ち着きを取り戻すのを見計らうと  
次の行動に移る事にした。  
過去を改変した記憶こそ今は失われているが  
その経験は生きているのだ。  
それを確かめてみるのである。

『も、もう帰らせて下さい……』  
弱々しく口を開く美波。

『ふふ、今度は布団の上に横になるんだ』  
だが、俺は容赦なく命令を下した。

『ひっ……』

『……も、もっやめて……お願い……』  
もちろん、彼女がそれを拒む事は出来ない。





『そういえば、キスの経験はあるのか?』

『……うう、ありません……』

『それじゃあ、俺が初めての相手という訳だ』

『え?』

チュク

ひゅ……

『ちゅぶ、ちゅる……』

俺は自分から舌を絡ませると美波の唇を奪った。

『……うう、いやあ……』

（……ひどい……私のファーストキスが……）

不意に唇を奪われ、美波は絶望している

ようだった。が、面白いのはこれからである。



「ふめぶ、じゆるるる……ふめっ……」  
暫く舌を絡ませていると美波の息遣いに変化が訪れた。  
顔や肌がほんのりと火照り、  
蒸し暑い訳でもないのに汗が滲みはじめたのだ。

キュ

「……どうしてムラムラしちゃんのっ……  
キスしたい訳じゃないのに……」

そう、美波の身体には先ほどのクーポンによって  
毎日欠かさず俺の体臭を意識しながら  
オナニーを繰り返すという淫らな習慣が  
染みついているため、  
こうして俺の匂いを嗅いだだけで  
その時の快感が甦ってくるのである。



（ふふ、キスだけで派手にイってくれる事を期待してたが、まあ、こんなもんか）  
望んだ結果が出ないのであれば、  
また別のお膳立てをしてやるだけの話である。

こうして、新しいクーポンを使用すると  
今度は更にねちっこく舌を絡めるのだ。

チュ  
チャッ

ちゅる

俺の身体を舐める時に限り  
舌と膣内の感度がリンクする



「……ひめ……っ!!」  
すると、その瞬間、美波は僅かではあるが  
気をやったのがわかった。

クチュ

ジュル

ビクッ

（……嘘……? どうして……?  
なんでイっちゃうの……?）  
思ってもみない展開に困惑する彼女。

だが、まだである。  
俺はもっと激しく舌と舌を絡ませる。



「ひあめ……うぼお……ふめ、ふめべええ……  
（いやあ、やめてええ……そんなに舐めたら……  
私……あめん……）」

ひあ……

クチュ

まるで膣内を満たされているかのような多幸感と  
舌が応でも身体が熱くなる俺の体臭。  
そんな快感に苛まれながら  
美波は絶頂を堪えるのが精一杯であった。



『……くちゅ……じゅるる……』  
『……ひっ!? またイっちやうう……』

ズレッ

ドゴ

クチュ

だが、そんな努力も虚しく  
美波は再び絶頂を迎えた。

『も、もう許してえ……』

『そっだな、キスはこのくらいにしてやるか』  
『……よ、よかった……』

ぞく



『じゃあ今度はこっちを頼むぜ』  
俺は当然のように肉棒を顔に押しつけた。

『……ふめぶり』  
『……ひっぞ、そんな汚い……』

ひっ

うげっ

グアッ

不意を突かれた美波の身体には  
キスの時よりも激しい快感が  
流れ込んでくるのだ。

『……っ、うそ……どうしてこんな事  
してるのに気持ちよくなるの……?』  
無理もない、何しろ舌を通じて  
性交の気持ち良さを余すところなく  
味わっているからである。

M



『ほら、遠慮しなれでもっと奥まで啜えるよ』  
『ふふふっ』

フッ

うっ

グッ

(……うっ、おまんこがキュンキュンするの……  
これ以上イクのはいやあ……)

半ば気をやりながら美波は身体を強張らせる。

だが、俺は手を緩める気はなく  
まるでオナホールでも扱つかのように  
肉棒の出し入れを繰り返した。

『……ぐちゅ、ふぐっ、ぐぶ……』

(ゆ、許してえ……このままじゃまたイっちゃうの……?)

一方、美波の方は如何に苦しくても逃げる事は出来ず、  
舌に龟头が押しつけられるたびに獲う無慈悲な快感に  
ただ耐えるしかないのだ。



ドピュ

ビュル

ビクッ

(くく、遠慮なくイケ)  
こうして俺は、そのまま美波の口内に精液をぶち撒ける。  
勢い余ってかなりの量が零れてしまったが構う事はない。

『…………ぐぶっ…………ひゅっ』  
(い、イクっ…………ぐすっ)  
何しろ、その汚液の感触によって彼女が  
条件反射的な絶頂を味わえるからである。

(…………うっ、こんなの嫌なの…………)  
こうして美波は顔を精液にまみれさせながら  
いつまでも怯えていた。

好きでもない男に惹かれているのではないかと思っているから。



































翌日。  
美波はこの日も赤のクーパーの効果によって  
俺の部屋にやって来ていた。

「……私はどうしてここに居るの？」  
昨日の記憶すら残っていない美波は  
ただただ困惑していた。

そしてどうもなぐやつれたような顔を  
しているのはここに来る前に  
日課であるオナニーに興じていたためである。

もっともオナニーに来たからには  
もっとハードな事をしなくてはならないのだ。





俺は橙のクーポンを取り出すと  
劇的な処女喪失をプロデュースすべく  
願いを書き込んだ。

これで、美波は条件さえ揃えば  
自らの意志で『女』になるのである。

「な、何をしてるんですか……？」

「情けない話だが、目の前に

お前みたいないない女がいるにも関わらず

俺は女性経験ないんだよ……」

我ながらセンスのない内容であった。

美波は童貞を奪うという行為に病的  
な願望を抱き、童貞を奪うチャンスが  
あるだけで理性を失うほど発情する

#### 裏面(補足事項)

- ① 1度童貞を奪い射精に導けば  
願望は失われる
- ② 記憶は俺の存在を認識した  
時期に組み込まれる



「え、もしかして……童貞？」

童貞……童貞、童貞……コソコソ……」

「うふっ、じゃあ私で童貞を捨てるってのはどうかしら？」

すると、突然いてもたってもいられない様子で

美波が回を開いた。先ほどまでの重苦しい雰囲気は既になく、  
下半身をもじもじさせながら卑猥な眼差しを俺に向けている。

「ふふ、からがわななくてくれよ。」

俺が君みたいなのは売れっ子アイドルとされる訳ないだろ？」

「それは買いがぶりすぎだと思えますよ。」





美波は服を脱ぎ捨てると俺に裸を晒してみせる。

『本気なのかい？』

『もちるんです。私、童貞の人とセックスするのが夢なの。それに今なら生でいいですし、そのまま腹なか出ししても構いませんよ？』

舌なめずりを繰り返しながら彼女は俺との距離を詰める。

（これじゃまるで痴女だなくくく）

『じゃあ、やれるって証拠を見せてくれよ』

『うふっ、わかりました』





ぐいっ

『これでいいかしらっ。』  
すると美波は大きく股を開くと、  
俺の手を太腿に添えるよう促した。

『へえ、これがアイドルの  
おまんこか……』

『綺麗でしょ？ 好きならだけ  
ハメていいんですよ。』

形こそ整っていたが、秘部の奥から  
醸し出される牝の匂いに  
俺は肉欲を刺激される気分だった。



フツ

『じゃあ、遠慮なく童貞を捨てさせてもらおうとするかな』  
俺は勃起した男根を秘部に重ねる。

ドキドキ

ほあ

ほあ

『うふふ、すぐくおっきい、ドキドキしちゃう……ほら、早く……美波のおマソコで童貞捨ててえ』  
野太い肉棒を前にしても彼女は物怖じする様子もなくただ童貞と合体する瞬間を心待ちにしていた。



ズチュ

俺はすぐに濡れた花弁へと男根を押し込んだ。肉の抵抗があるのはわかっていたが、優秀な息子の前には些細な抵抗に過ぎない。

あんっ

ヌプ。

程なく、織部からは処女を失った証が流れ出る。『おやおや、美波もはじめてだったのかい？』『あん、そうなの。でも重貞を食べたくて我慢出来なかっただけだから気にしないでくださいな。』そう言うと美波は自ら腰を動かし男根を締めつけてくるのだ。



ヌプッ

ヌヂュ

「ああん、すごい……  
童貞チンポ気持ちいい……」  
美波は夢見心地で  
肉棒を堪能していた。  
射精させるまで童貞食いは  
終わらないのである。

俺の方も美波の処女を  
味わうべく腰を動かしてはじめる。  
「はあん、素敵……」  
童貞さんなのに上手だわ……  
おまんこ薄けちやいそう」





キュッ

キュッ

「ふふ、実はチンポなら  
なんでもよかったり  
するんじゃないの？」  
「あ、ん、違います……  
童貞じゃなきゃ嫌……  
初めておマンコの味を知る  
チンポじゃないと  
ダメなの……」

まるで夕夕を捏ねるかのよう  
に美波は性癖を強調すると、  
身も蓋もなく腰を振りはじめた。  
「はあはあ……だからもっと  
救しくおマンコ挟んで……  
遠慮なく初腹なか出しして  
いいですからあ」



ジュグ

ジュグ

『くく、なら俺が射精(だ)したら  
美波もイクんだぞ?』  
『ああん、はい、イクます、  
中出してイクますから  
もっと重貞チンポ  
味あわせてえ……』

ハッハッ

待ちきれないのが、  
秘部の締め付けが  
更にきつくなるのがわかった。  
『はあ、はあ、すごい熱い……  
奥まで届いて……おまんこ  
気持ちいいの……  
はああん……』

俺も秘部の温もりを感じながら  
初めての膣出しに向かい  
動きを早める。





『ふふ、出すぞー！』  
こうして俺は特濃精液を  
容赦なく膣内へと放った。

ドビュ

ドブツ

びんっ

ジク  
ジク

『あめん、嬉しい……  
熱いの出てるっ……はあはあ……  
イクっ……童貞チンポでイクのぉ』  
美波もそれに続くど  
小刻みに身体を揺らし絶頂に達する。



グチュ

又チュ

『……っふ、まだ出てるっ♡』  
こうして願望を満たした彼女は  
余韻に浸りながら  
いつまでも男根を感じていた。

あんど♡

今頃は童貞を食うために  
処女を捧げた』という事実が  
過去の記憶として  
組み込まれていける事であろう。

そして、俺も童貞を奪ってくれた  
膺の温もりを飽きる事なく  
堪能し続けるのだ。

美波にはなくクーポンに  
感謝しながら。



























































『……うっ、何をするんですか？』

今日も家にやって来た美波に全裸になるよう命じた俺は、そのまま新しいクーポンを彼女に見せつける。

『……これは？』

『ふふ、文面の通りさ、俺の精力が尽きるのとお前が俺のチンポの虜になるの……どっちが早いかな』

『そんな、酷い……』

『酷くはないさ、これこそフェアな勝負だぜ？何しろ、美波にもチャンスがあるんだからな』

『……』

美波は顔を俯かせたが、いずれにしろ拒む事は出来ないのだ。

そして、俺は紳士的なので

こちらの精力がほぼ無尽蔵である事は言わないでおいてやる事にした。

1回イクたびにどんどん俺のチンポとザーメンが好きになる



『じやあ、まずはチンポを啜えてもらおうかな』

『……………は、はい』

『フェラチオの経験は？』

『あ、ありません……………』

『なら、心を込めてしゃぶるんだな』

ちゅぽ  
ぽ

『うう、なんて匂いなの……………しかもすごく熱い……………』

『それに、なぜだかわからないけどアソコが疼いてくるの……………  
でも、このくらいなら……………耐えられるかも……………』

『ちゅる……………くちゅ』

美波はおずおずと肉棒に舌を這わせた。







『ほら、舐めてるだけじゃなくて口で啜えてしごくんのだ』  
『……は、はい……ちゅぷ……』  
『ひい……アソコに何かが入って来るみたい……』  
『言い知れぬ不安を覚えながらも唇で肉棒を扱く美波。』  
『じゅぽ、じゅぶ、じゅく』  
『……うう、感じちやう……どうしてなの……？』  
だが、如何に快感が湧き上がっても  
奉仕を止める事は出来ないのだ。

ぐぽっ  
ぐちゅっ









『零さず飲むんだぞ』

『ひっ！』

『熱い……それにいっぱい出てるの……』  
大量の射精を口内に受けた美波だったが  
衝撃はこれで終わりではない。

ズグッ

ドピュ

ピュル

いっ  
げんっ

『……ふあぶでんきゅ……でぐっ』

『ひい……いつちやう……』

そう、今日もまた精液の感触で達してしまったのだ。  
そもそも、ぶっかけられるとイク体質は健在な以上、無理もない話なのだが、  
その記憶がない彼女にとって避けようのない爆弾なのである。



『ガキゅーぐわー……』

『……うう、ごんなの好きになりたくないのに……』

そして、休む間もなく美波は自らを襲う変化に怯えていた。一度絶頂を感じただけで男根に対する嫌悪感が露骨に失われていたからである。

その証拠に、既に射精を終えた肉棒を

啜え続けているというのに全く嫌ではないのだ。

『……うう、どうしよう……』

こうして彼女は言い知れぬ不安を抱きながらも俺が次の行動を促すのをただ待つしかなかった。

ぐちゃ

ちゅぽ

くちゃ







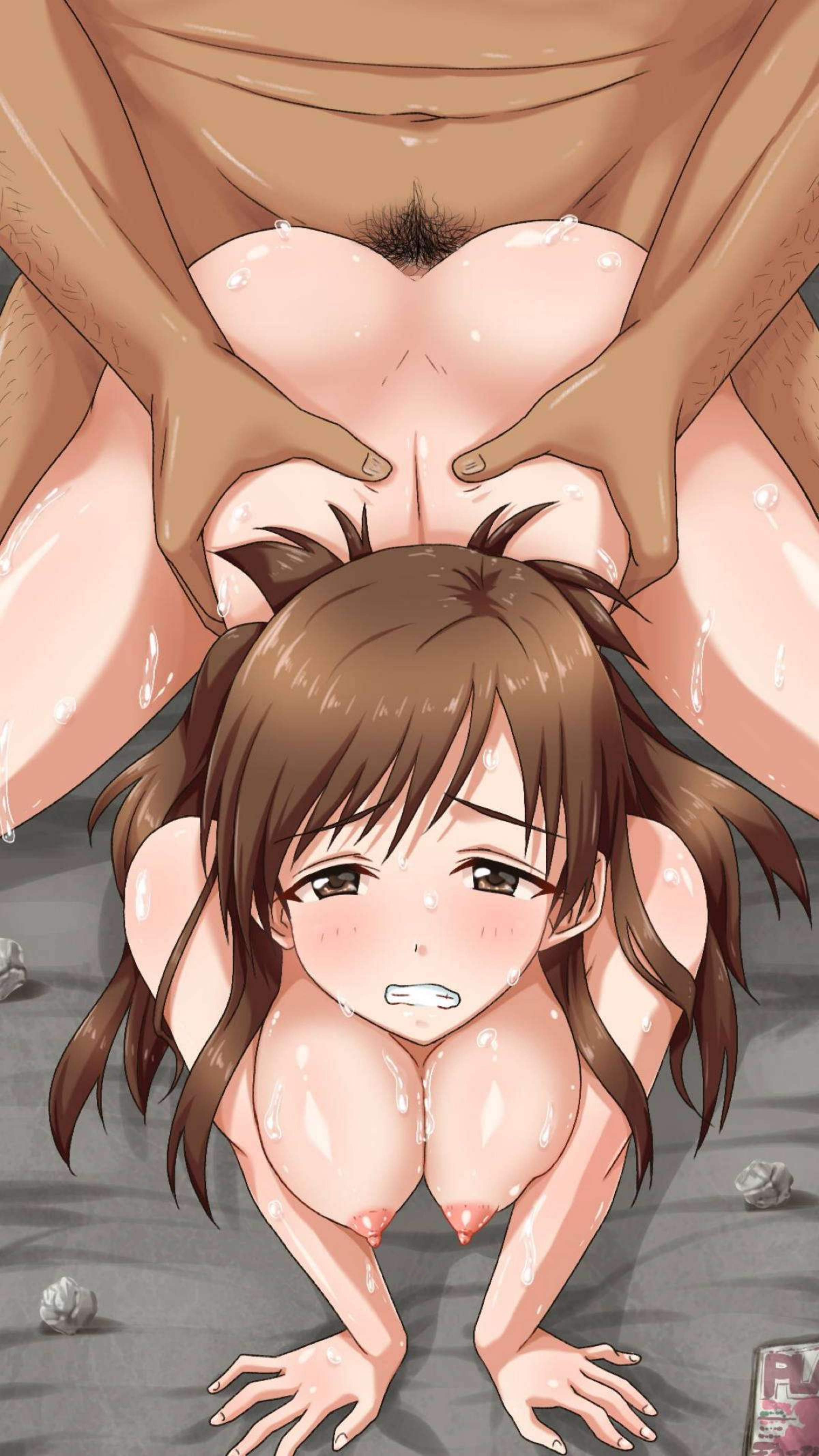












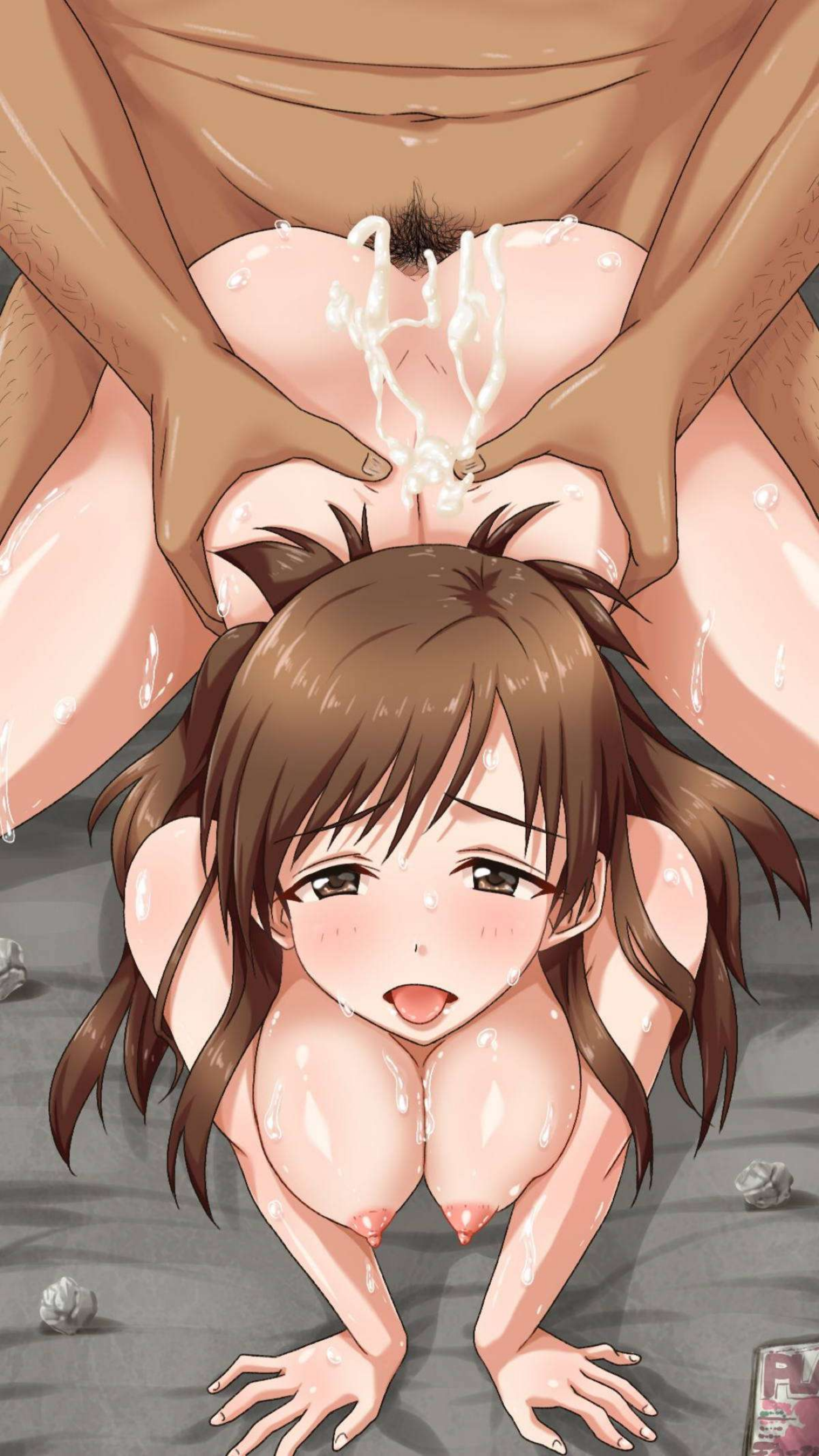




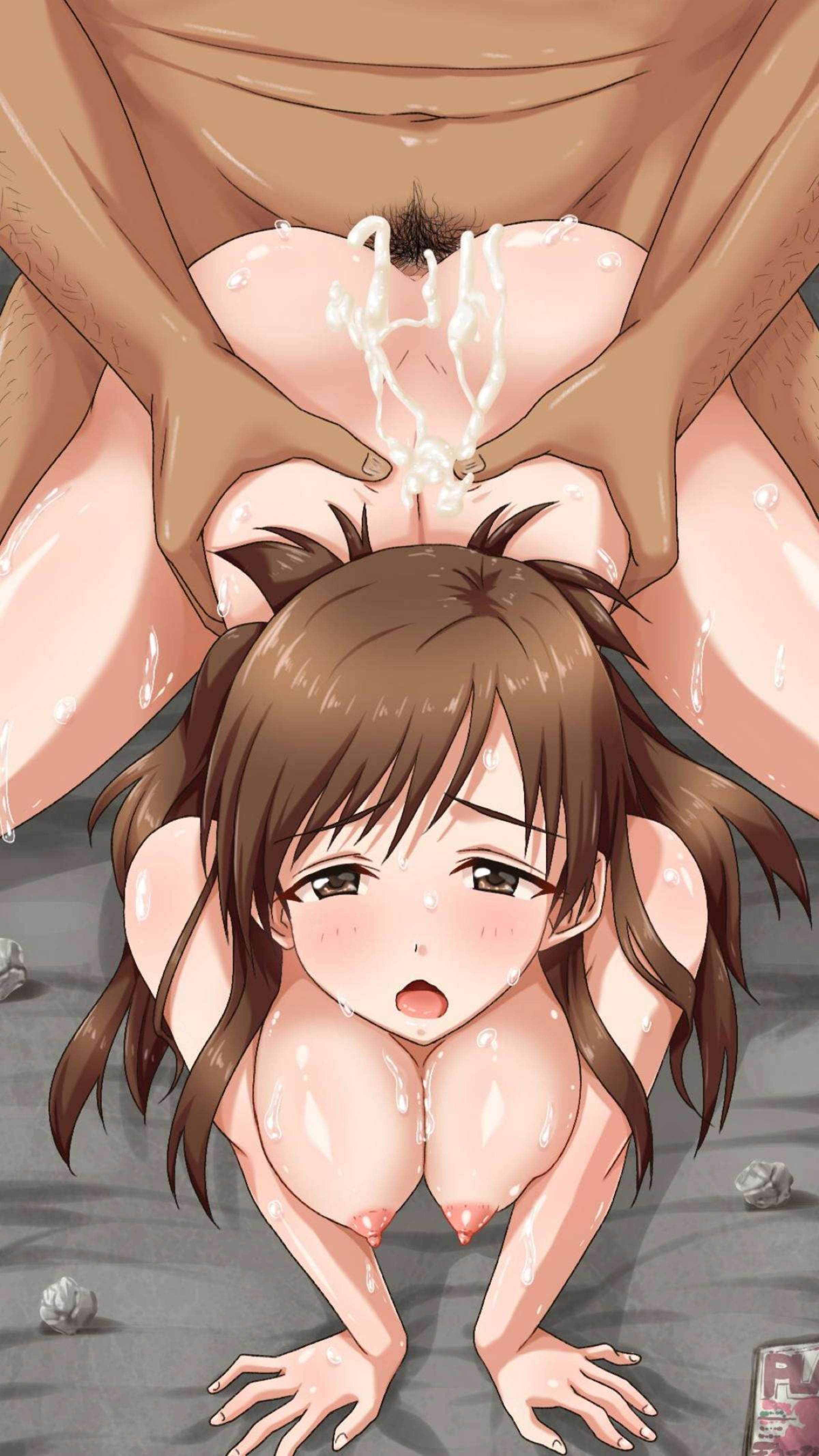




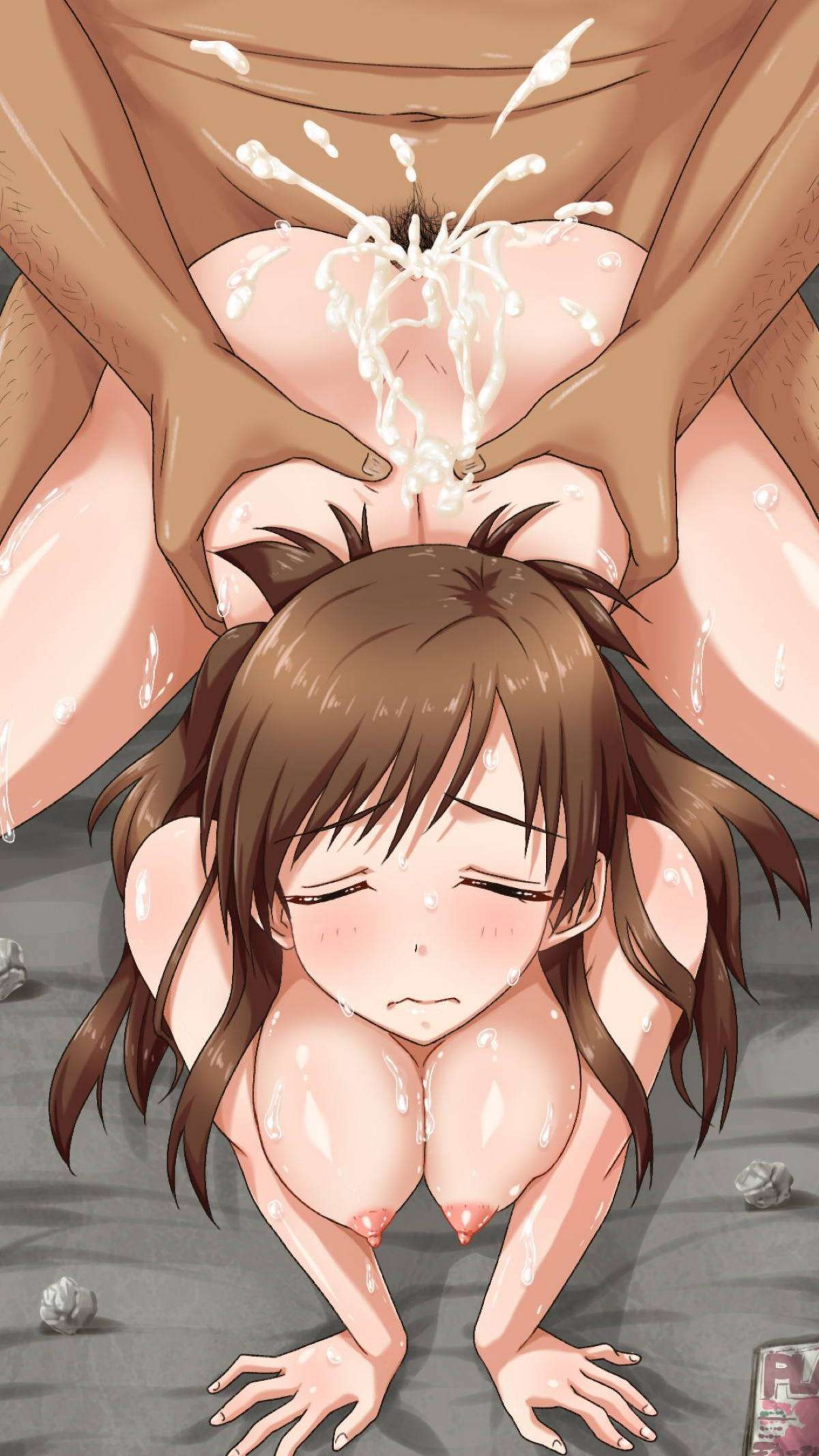




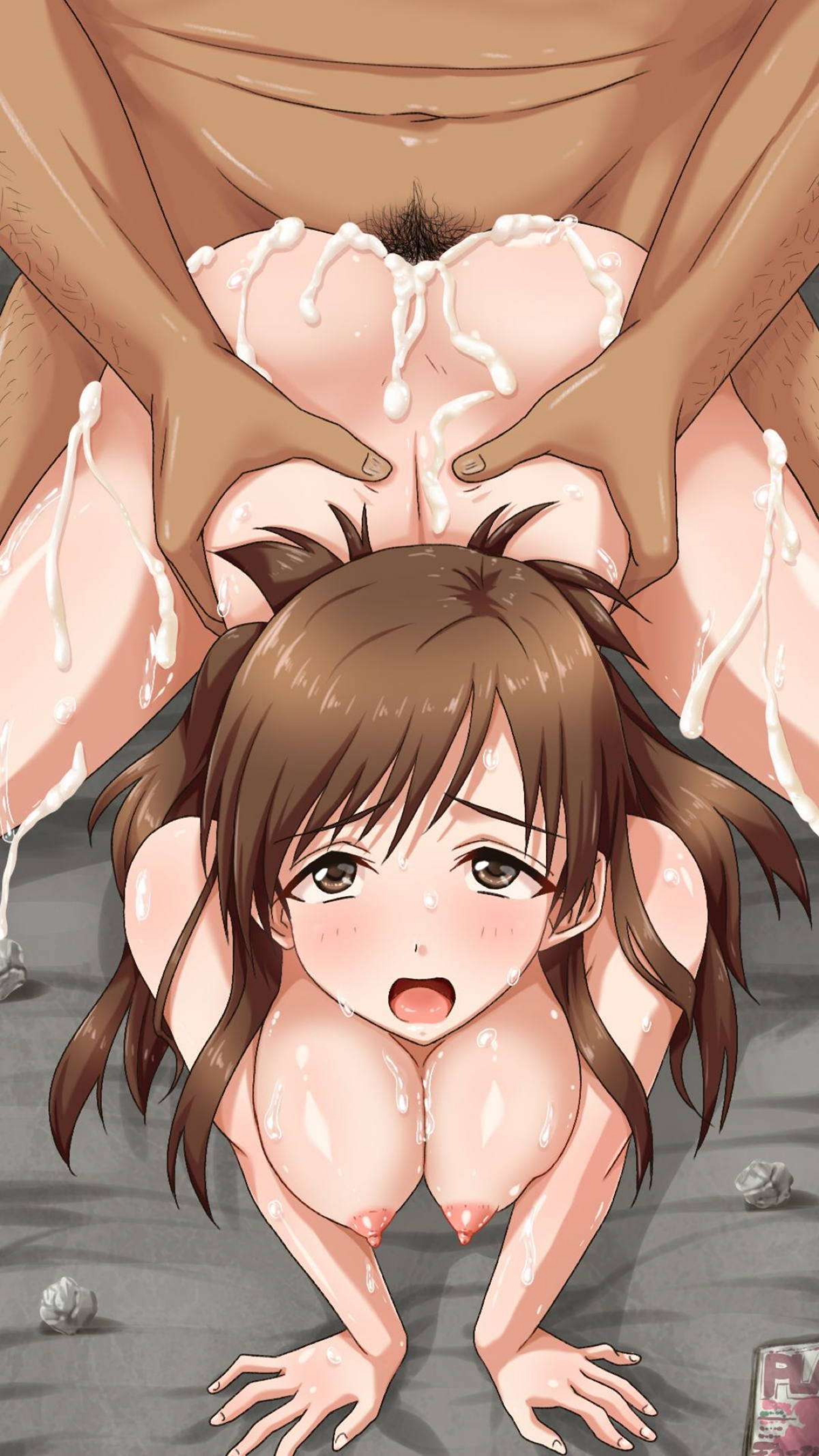














『さて、今度は尻を味あわせてもらおうとするか。  
にしても、すっかりチンポが好きになったみたいだね?』  
『……そ、そんな……違います……』  
そう否定してみせる美波だったが、  
秘部から溢れる愛液を見るとまるで説得力がなかった。

ヌテュ

（うう、あんなに出したはずなのに……  
まだそんなに固いの?）

はあ  
はあ





「ほら入ったぜ」  
「ひい!?」

(……なんでもなんでも感じのあつ?)

ヌプッ

ズキョ

予想外の気持ち良さ目を見丸くする美波。

!!

ビクッ





『ひい……ひあ』  
『お、お尻焼けちゃうう……』  
『ふふ、アイドルはケツでも感じるみたいだな』  
『そ、そんな事……ありません……』

グプッ

ズチュ

『い、いやああ……動かないでえ……  
これ以上……いけないのお……』

美波はただただ堪えるしかなかった。  
だが、身体を強張らせるほど、  
俺は抵抗なく男根の出し入れが出来るのだ。





『はあはあ……お尻裂けちゃう……』  
『ふふ、それが嫌ならケツの力を抜いて  
素直にチンポを受け入れるんだな  
そうすりゃ、少しはマシになるぜ?』

グチュ  
ギツツ

俺は今にも括約筋を引き裂く勢いで  
腰を打ちつける。  
もっとも、例え壊れてもクーパーンさえあれば  
いくらかでも元に戻せるのである。

びん





「うっ、はあ……はあ……」  
美波は俺の言う通り身体力を抜いた。

ズ  
パ  
ッ  
ジ  
ュ  
ア

「ひああん……はあ……ん」  
（ああん、らめえ……これだと感じちゃう……）  
当然の事ながら、感度という意味では逆効果である。  
そして、俺は一気に尻穴を蹂躞すると  
そのまま欲望をぶち撒けるのだ。

はあ  
はあ





「ひいいい、熱いの出てりゅうう」  
「へう、嘘……ま、またイ、イっちやうのおお……!?!」  
直腸に精液をぶち撒けられながら為す術なく気をやる美波。  
「ひやふん……」

ドピュ

ドプッ

ビクン

びゅん

「ふふ、どうだ？ 俺のチンポは？」  
「ふー、ふー、気持ち……いい……いい……ち、違います……」  
「へうう、ダメ……こんな男に屈しちやダメ……」  
美波はしきりに耐えようとしたが、  
未だ肉棒が埋まっているためその声は弱々しい。





(さて、いつまで持つか)  
俺は全く衰える事のない肉棒で更に肛門を貫いていく。  
今の絶頂で美波の身体は完全に弛んでおり、  
男根は尻穴を我が物顔で蹂躪していくのである。

ズチュ  
ズチュ

『ひああ……す、少し休ませて……』  
『……うう、これ以上突かれたらどうにかなっちゃう……  
でもカが入らないの……』

あんっ…



『その割には自分から尻を振ってるじゃないか』  
『そ、そんな、違う……』  
(嘘よ……嘘つ、そんな事ない……)

ズツ  
ズツ

『ふふ、ようやく俺のチンポを好きになってくれた記念だ  
さっきより大量に出してやるぜ』  
『はあ、はあ……だめえ、外にい……』





「ひあああああ!?!」  
「あ、熱いの出てるのぉ……いやあ……あ……」

ビュルツ

ドプツ

ズンッ

がろっ

「い、イグう!」  
美波はだらしない声を漏らすとそのまま絶頂に達する。  
肛門は激しく締まり、肉棒に更なる射精を促すのだ。





『ひあああ、お尻でイクのらめええ……でも、また……またイクう……』  
籠が外れたように、美波は何度も何度も絶頂を繰り返した。

トロ……

ドロ……

はあ  
はあ

（……うう、チンポ気持ちいい……それに精子あったかいのお……ああん、アクメ止まらないよお……）  
そして、それは彼女に取り返しのない影響を与えるのだ。

『あつたかい……うふっ……』  
だが、もはや美波がそれを嘆く事はなかった。





































『そろそろ場合いだな』

俺は美波を新しい人間に生まれ変わらせるべく  
最初に使った赤のクーパーの半券を切った。

それによって、この数日彼女に与え続けた  
偽りの過去や、様々な性癖が正しい情報として  
認識されるようになったのだ。

『さてこれでどうなるか……？』  
俺は期待を胸に美波の行動を待った。

美波が俺の部屋に来て  
何でもしてくれる





それは予想より遙かに早くやって来る。

その日の深夜、誰かが家の中に入ってきたのだ。そして、俺が寝たふりをしていているのをいいことに、あるう事が布団の中へ潜り込んでくるのである。

「……はあ、はあ……」  
無論、それは美波に他ならない。

余裕がないのか、自制が利かないのか

お粗末すぎる侵入であったが

本人はお構いなしに俺のパンツを脱がすと  
そのまま肉棒に柔らかいものを押しつけた。

「……ふふ、がっつきすぎだな」



『あぁん、私の処女を奪ってくれた極太チンポお……  
臭いも形も童貞の頃のままでわあ……  
思いつきだけで髪が出ちゃう……じゅるる』

『うふっ、固くなって来た……感じてくれてるのね、  
嬉しい……もっと舐めちゃおっと♡  
ちゅぷ、ちゅ、ちゅば……』

程なく布団の中から現れた美波は、  
肉棒を乳房で挟み込むと、  
（記憶として）数年ぶりに味わう感触に  
歓喜の声を上げていた。

ぬちゅ

ぽっ

きゅん





『はぁあぁん、久しぶりに飲みたいな……絞りたての生ザーメン、  
お願い、早く飲ませてえ……ちゅぷっ、ちゅる』  
お世辞にも綺麗な男根とは言えなかったが、  
彼女は全く気にする様子もなく亀頭を舐る。

ちゅぷ

ちゅる

ちゅる

『あぁん、この匂い大好きい……  
あぁん、もう一生離れたくないのぉ』  
そして、しきりに頬ずりを繰り返しながら、  
執拗に二つの膨らみで絞り上げるのだ。



「……くく、おっぱいも舌も責めが半端ないぜ……、  
どんだけ頭の中がチンポ漬けなんだよ」  
俺は意地悪な事を考えながら、その奉仕を堪能していた。  
「ふあぶ、じゆる……美味しい……」  
「差が止まらないよお……」

「はあはあ……いっぱい  
気持ち良くなってくれると嬉しいな……」  
「寝ていると、少なくとも美波は思っている俺に  
淫猥な肉の子守歌を奏で続ける。」

めちゅ

ぎゅっ

あんっ

ハハハ



「はあはあ、飲みたい……んんから出るミルクちようだい……  
……ちゅぶ、ふあぶ……」  
龟头を凝視しながら、美波は乳房だけでなく  
舌も使って肉棒を舐っていく。

くぽっ  
くぽっ

「ああん、びびってした、んんが気持ちいいのかな？  
……ちゅぶ、じゅるる」  
まるで弱点でも調べるかのように  
彼女は満遍なく男根を唾液で満たす。  
そして、乳房で締めあげると  
間断ない快感をもたらすのだ。





とは言ってもやすやすと精液を飲ませる訳にはいかない。  
『じゅるる』ちゅぷ、あめん早くう……  
『美しいのいっばい出して欲しいのお……』  
それに対し美波は執拗に亀頭を舐り、  
性器のように唇を重ね抜く。  
先ほどまで強引に挟んでいただけの乳房は  
濡んだ汗と垂れ落ちた唾液によって  
悩ましく擦りつけられていた。

ずちゅ

ずぽっ



『あん、もうちよっとで出そう……  
早く濃いミルク飲ませて欲しいのぉ……』  
舌なめずりをしながら、哀願するような表情を見せる美波。  
それだけ彼女が必死な証拠である。

はあ  
はあ

れろっ

すちゅ

『はあはあ……いつばい出してえ……』

美波の口と顔にお恵み下さいませえ……じゅるっ

（……ふふ、さすがに限界だな……）  
俺は彼女の願いを叶えるべく精液をぶち撒けた。







「ふあぶ……じゆる……」  
こうして脈打っていた男根が落ち着くと、彼女は亀頭を唾え込み  
今度は尿道に溜まった精液を吸い上げはじめた。

ちゅぽぽ

んっ……

ヒクッ

ミロト

「ん、……ちゅぶ、ちゅる……」  
びくっ、あん……美味しい……」  
そして、口内でじっくりと味わった後、  
喉を鳴らしながら嚥下していくのだ。  
それだけで迎えてしまう絶頂に身体を震わせながら。































『うふっ、今度はおまんこで味わわなきゃ……』

完全に牝と化している美波の奉仕は、これで終わる事はなかった。  
今度は、俺の上に跨ると股間を肉棒に擦りつけはじめた。  
機部は既にべとべとになっており、  
その熱と湿り気がはつきりと感じ取れた。

ヌキユ

ワキユ





「ああん、固くなって来た……はあはあ、もう我慢出来ない……」  
美波は自ら腰を浮かせると肉棒を挿入しはじめる。  
花弁は絡みつくように亀頭を捉えると  
そのまま膈内へと吸い込んでいくのだ。

ジュポ

ヌプッ

美波





『ああ……満たされるっ……  
あの時と同じ……やっぱりこのチンポなの……  
処女を奪ってくれた重貞チンポ……』

数日前に体験した数年前の記憶を思い出し興奮する美波。  
そして、抑えの利かない様子で一心不乱に腰を振りはじめ。

ズグズグ

グググ





「はあはあ……気持ちいい……  
また美波に膣出ししてえ……  
熱いせーしてまたおマンコイキたいのぉ」  
もはや歯止めの利かない様子で美波は  
肉棒を味おい続ける。  
頭の中は本当に俺の肉棒の事  
でいっぱいなのだろう。

ズン

ズン

ズン

ズン





「ひあぁん、止まらない、腰止まらないのぉ……  
アクメ来るぅ……チンポしゅごいっ」  
まさに自分が絶頂するためだけの  
品性の欠片もない動き。

美波を知っている者が見れば  
あまりの下品さに卒倒してしまうかも知れない。  
だが、これこそが俺の欲望によって  
作られた理想の痴女の姿である。

ズシ

ズッ

ズキ

ズシ





(そろそろ望み通りイかせてやるぜ)  
俺は膣内の一番奥へと精液をぶち撒ける。  
それは焼けるような快感を美波にもたらすのだ。

『あはぁん、来たぁ……熱いの来たぁ……  
膣出しザーメン最高お……  
おマンコ薄けちやううう……』  
彼女は身体を反らし、声を震わせると  
極上の快感に酔いしれていた。

ビクッ

ドピョ  
ドッ



「はあはあ、気持ちいい……おながいっばいなのお……でも、まだ足りないよお……ずっと繋がっていたいの……うう、でもそろそろバシそう……」  
そして、少しだけ落ち着きを取り戻したのが、ようやく自分が招かれざる客である事を思い出した。しかし、だからと言って理性が働く訳ではなく、未だ自らを貫く男根から離れられずにいるのだ。

「ああん、久しぶりのチンポだし……もうちょっといいよね……あん♡」  
こうして、彼女はいつまでも痴態を晒し続ける。まるで最初からそうであったかのように。

ヌキ  
キュッ

グッ  
グッ  
グッ













































翌日。

夜になるとやはり今日も美波がやってきた。だが、俺はあらかじめ部屋から出ており、遠目から彼女の姿を観察していた。

すると、俺がいよいよ事を確認した彼女は

何かを持って部屋から出てくのだ。

（……どうやら置き土産に気づいたようだな）

そして、美波の後をつけると、

彼女が並くの公園にある

公衆便所に入っていくのがわかる。



何をやるかわかっていた俺はさっそくクーポンを使う事にした。

オナニーをする場合は鍵はかけず、  
俺が声を掛けるまで  
人の気配には一切気づかない

そして、彼女が入った個室のドアを開ける。



『じゅるる、ちゅる……あぁん美味しい……』  
すると、やはり美波は個室の中でオナニーに耽っていた。  
しかも、その手には俺が部屋に置いておいた  
精液の詰まったコンドームがぶら下がっている。

『はぁはぁ、少しだけだけどチンポの味がする……』  
その衛生的とは言えないゴムの内側へ  
彼女はねつとりと舌を這わせているのだ。





『それに濃くて生臭くてドロドロしてるザーメン最高……  
また直接飲みたいのぉ……あん、今度家に忍び込めたら  
お尻でイかなきゃ……』



ほあ  
ほあ

くちゅ  
ぬちゅ

『でも、部屋にコンドームがあるなんて……  
やっぱり彼女なのかな……？  
羨ましいけど……私だったら生ハメでいいの……  
その上、美波はコンドームから女の影を感じ取る……  
嫉妬していたのである。』



『あああん、全財産差し出してもいいから、あの人の生チンポ欲しい……  
はあはあ、都合のいい女でいいのお……』  
そして、救いようのない願望を口にしてしながら自慰に没頭する美波。



無理もない、なにしろ彼女にとって俺の肉棒は  
生きていく上でなくてはならない程のウエイブを占めてくさるのである。  
それはもはや、アイドルを続ける事よりも貴重で尊いのだ。



「あぁん、イク……使用済みザーメンでイクうう……」  
多少押し殺してはいるようだったが、  
ほとんど意味をなさないレベルで美波はイキ声を上げた。  
だらしなく下品な品性。  
これもまた新しい美波のごく普通の姿である。

「あぁ、もっと精子い、これじゃ足りない……」  
チンポ処理しが能のない私にもっとちようだい  
しかも、激しく自らを卑下すると被虐心を掻き立てるのだ。



ブルッ

ブル

ビクッ

ビクッ



（そるそるだな……）  
「ふふ、どこの痴女が喘いでいるのかと思えば美波じゃないか」  
「ひっ……！？」  
俺が声を掛けた瞬間、クーポソの効力により  
彼女はこちらに気づく。  
「おいおい、部屋に置いてあったコンドームが  
なくなっと思ったたらここにあったのが。  
まさか売れっ子アイドルがコンドームまがいの  
行為をするなんてね」

「……それは」  
事実を指摘され、美波は言葉に窮していたが  
コンドームはしっかり握りしめたままであった。  
しかもその瞳は俺の股間に釘付けになっているのだ。

ビクッ

ぎゅっ





俺はそんな美波の眼前に肉棒を突き付ける。

『ふふそんなにチンポが欲しいのか？』

『ははい……欲しいです……』

『ならば、二つ条件がある』

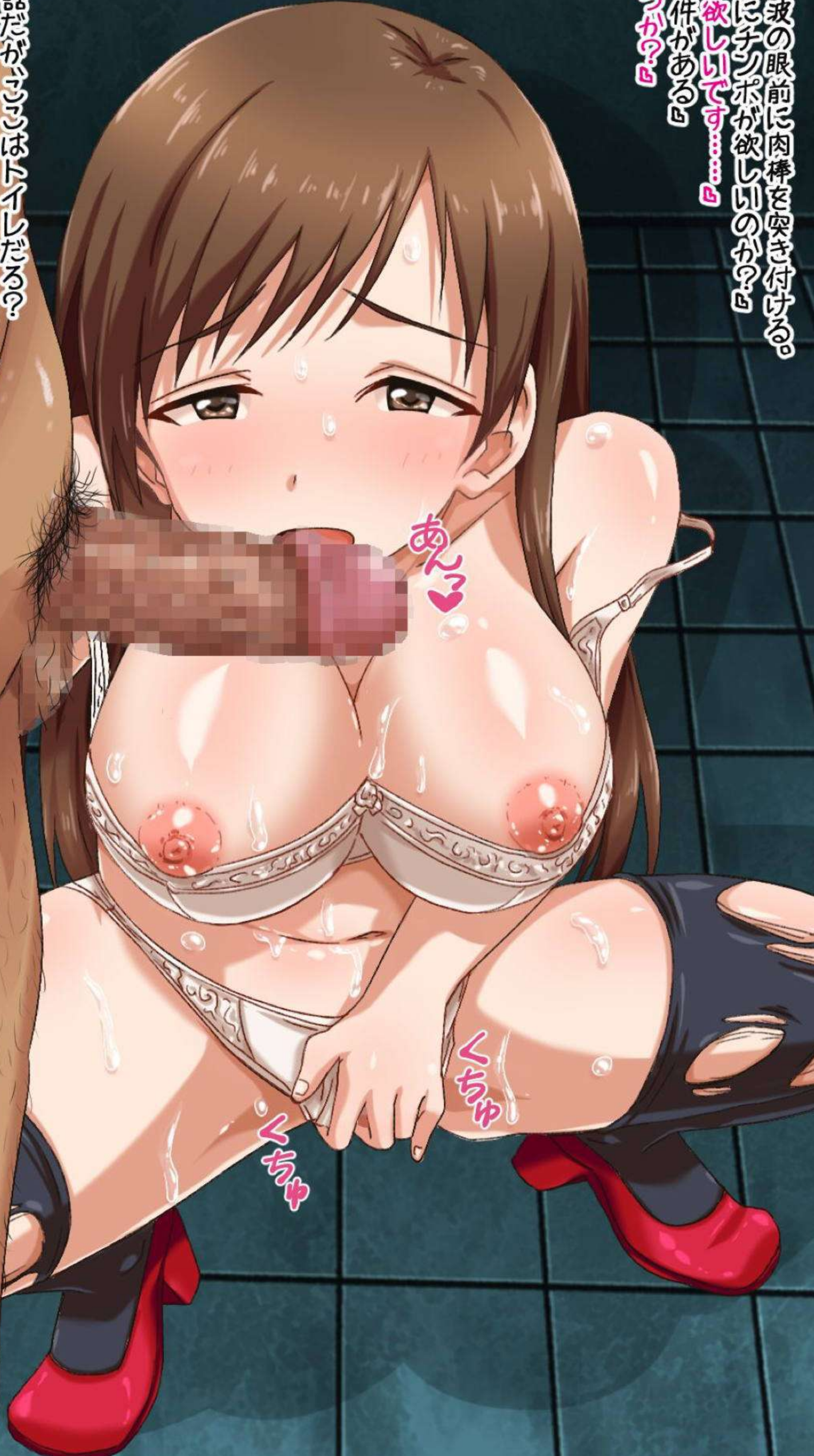
『なんででしょうか？』

『当たり前前の話だが……ここはトイレだろ？』

俺はおしっこをするためにここに来たんだ。

だから美波が便器の代わりに務めてくれるなら考えてやってもいいぞ？』

俺は彼女が何処まで生まれ変わったかを確かめるべく容赦ない行為を求めた。





「うふっ、もちろんな便器になります、ちゅぶ……」  
すると、美波は当然のように亀頭を啜えると、  
鈴口全体を唇で包み込んだ。  
「うすれば小便を零す事なく飲み干す事が出来るのである。  
（……くく、まさに生まれながらの肉便器だな）」

「ならば、さっそうく使わせてもらおうぜ」

俺も当然のように即席便器へと小便を流し込んでいく。

「ふあぶびびくびびくびびく」

彼女は唇を窄めビールでも飲むかのように飲尿を続けた。

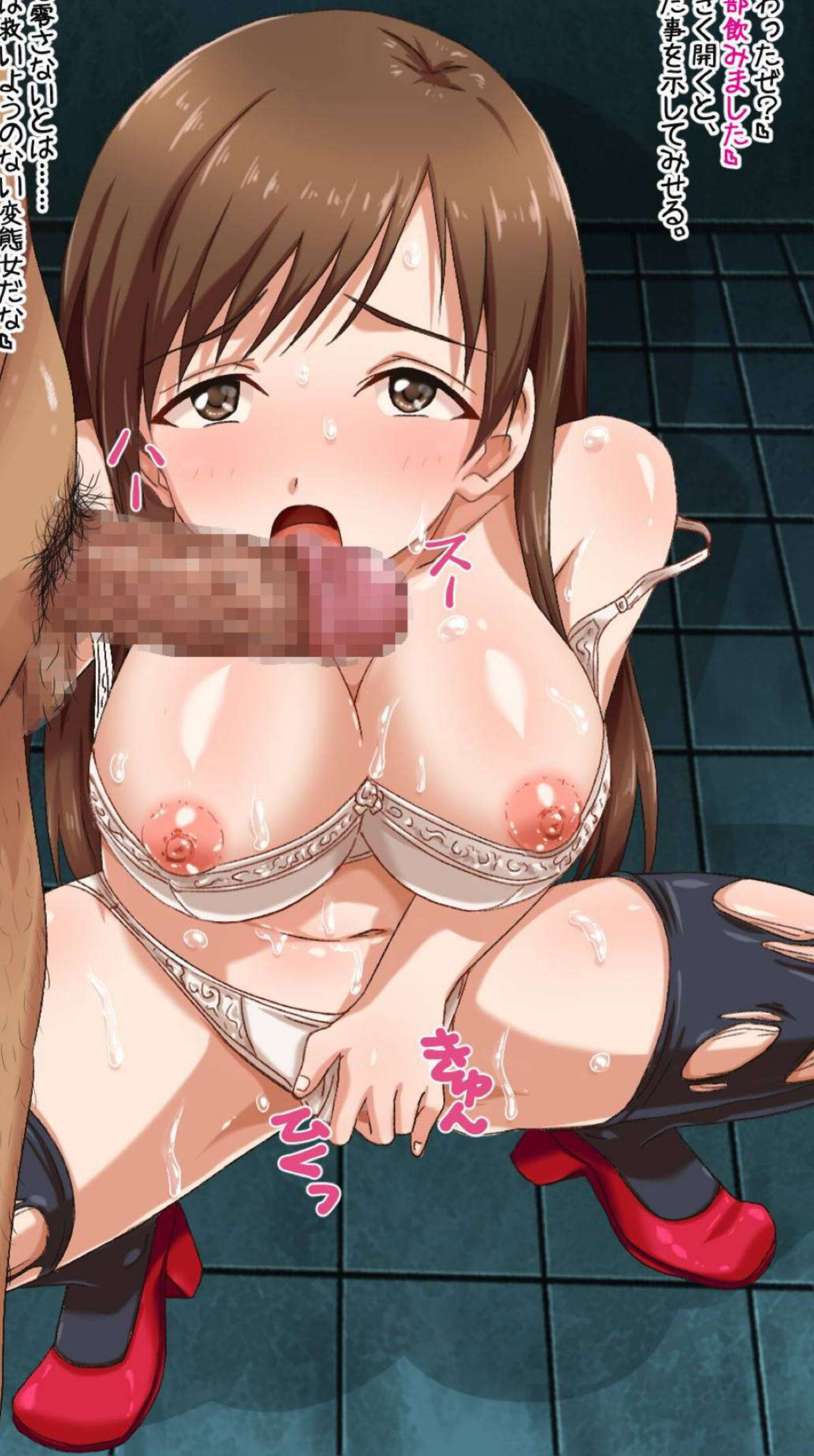
そして、その間も秘部を弄ると、1日ぶりに味わう肉棒の感触に酔いしれるのだ。





「ふふ、出し終わったぜ？」  
「……はい、全部飲みました」  
美波は口を大きく開くと、  
全て飲み干した事を示してみせる。

「まさか一滴も零さないとは……」  
ホントに美波は救いようのない変態女だな  
「うふっ、嬉しい……ああん」  
こうして美波は俺の蔑みの言葉に身体を熱くすると  
眼前にある肉棒の匂いにいつまでも酔いしれていた。









































こうして美波を家に連れ帰った俺は  
改めて今回の一件を謝罪させる事にした。  
全ては自らの淫猥さが招いた出来事である事を  
自覚させるためである。





『先ほどはチンポに飢えて  
コソドームを盗んでしまい  
心からお詫びします……』  
『他にも何かあるんじゃないか？  
正直に答えれば大目に見てやらん事はないぞ？』

『は、はい……昨日もここに忍び込んで  
お口とおマンコで直接チンポからザーメンを  
飲ませていただきました、ごめんなさい……  
あなたのチンポなしじゃ生きていけないの……  
お願いします、ハメてください……』

キュン

謝罪と言うよりも自らの性癖と願望を  
暴露しているような美波の姿に  
俺は失笑を禁じ得なかった。





『けっ、この前は俺の事をあしらったのに、  
今度はすり寄ってくるのかよ？』  
俺はあえて強い口調でそう罵った。

『うっ、ごめんなさい……  
あの時はどうかしてました……  
実はあなたのチンポを想像しながら  
毎日オナニーしてるんです。  
それに重貞をいただいた事は今でも  
はっきりと覚えてるくらい感謝してます……  
ですから、性欲処理のためだけでもいいので、  
またおマンコ使って下さい……お願いです』

じゅる

それに対し、美波は布団に頭を擦りつけると  
必死に嘆願を続けていた。





『じゃあ、俺のチンポのために  
アイドルを引退できるか?』  
『はい、もちろんです!』  
チンポのためにアイドルやめます!』

『ふふ、本当にいいのが?  
事務所のプロデューサーに  
嫌われてしまうかもしれないぞ?』  
『え? あんな人どうでもいいですよ  
私はずっとあなたのチンポ一筋ですし、  
はあはあ……』

ヒクッ  
ヒクッ

美波は当然のように答える。  
『どうやら偽りの記憶が、  
本来の感情までをも歪めてしまったようだ。』





『なら、本当にアイドルを引退してチンポ奴隷になってもいいんだな？ファンたちを幻滅させる事をさせるかもしれないぞ？』

『はい、構いません。私はあなたのチンポだけあれば幸せなんです……。お願いします、どうかチンポ穴にならせてください……。』

キュン

美波の決意は固い、いや、もはやそれ以外の生き方は選べないのである。





『なら肉便器になった証に  
ケツの穴でも使ってやるとするか』  
俺は彼女の背後に回り込むと  
そのまま尻に肉棒を突き立てる。

『ああん、お尻いいのお……  
ケツハメ嬉しい……』  
美波は下品な声を上げると、  
尻を高く上げ、更に奥へと男根を導いた。

ズプッ  
ヌキユ

『はあああ……太い……チンポ感じるう』  
そして、しっかりと竿を唾え込むと  
自ら腰を動かし、温もりで包み込むのだ。





「ああん、このチンポ気持ちよすぎるっ  
おふう……」  
次の瞬間、美波はあっさりと達するご  
秘部から潮を吹き上げる。

ズキョ  
スプッ

ビュルッ  
プシヤァー

「ああん、ごめんなさい……  
美波はチンポに完全敗北しちゃいました……  
どんな責めにも耐えますので  
チンポでお仕置きしてください……」





『どうせ、敗北しなくても  
チンポが欲しいんだろ？』  
『は、はい、欲しいです……』  
『もっとチンポに溺れたいのぉ』  
美波は浅ましく腰を振ると  
飽きる事なく肉棒を啜え込んだ。

『この変態め、尻穴にたっぷり注いでやるから  
しっかりイクんだぞ？』  
『あ、ん、嬉しい……』  
『いきますう、お尻でアクメしますから  
遠慮しないでお願いします……』

ゴブッ  
グズッ





「ああん、嬉しいっ……ああ、チンポ膨れて……  
はああん、熱いの来りゅううう……!!!  
肉便器幸せええ……」  
精液を注がれると美波は自らの立場に  
歓喜しながら絶頂を迎えていた。

ドブツ

ドクツ

キュッ

ヒクッ

「ひあああ、あちゅい……またイク……  
頭薄けちゃう……」  
そして、何度も気をやりながら  
極上の快感に溺れるのだ。  
例え今、全てをリセット出来たとしても  
かつての彼女には戻れない程に……







キュ  
プ

グ  
プツ

ピ  
ポツ

ド  
ロツ

(……さて、これ以後はアイドル廃業だけだな)  
こうして俺は最後の一滴まで精液を注ぐと  
美波に相應しい狂宴に思いを馳せるのだ。



フ  
フ  
フ































翌日。  
俺はさっそく美波のアイドル引退興行を  
全世界に生中継する事にした。

既に機材の準備は整っており、  
あとはこれをインターネット上に配信するだけであった。





「準備はいいか?」  
俺は下半身に目を向けると、  
そこにはフリーゲだけを纏った美波が  
熱心に肉棒奉仕を繰り返していた。  
既に1時間ほどしゃぶっていたが、  
まるで飽きる事はないようである。

ちゅわん

ちゅん





『ふふふ、はい……もちろんです』

一旦、男根から唇を離すと  
美波はうっとりとした声で答えた。  
その間も手で肉棒を扱っており、  
一時も奉仕を止めたくない様子である。

クキョ

キュッ

『ふふ、ネットに繋がったぞ？  
視聴者のみんなに挨拶するんだ』  
『はい、わかりましたあ』



『皆さんこんにちは、アイドルの新田美波です。今日は私の特別ライブをご視聴いただきありがとうございます。』

その声は肉棒に纏る妖艶さとは裏腹に、アイドルらしい逸き通ったものであった。

『私は今日からこの素敵なおチンポ専用の肉便器になるため芸能界を引退したいと思えます。じゆる……うふっ、すぐく運しいおチンポでしょう？ 私……今、とっても幸せです。』

ハァ

ハァ

ゴクッ





「ふあぶいじゆる……ちゅくちゅ……」  
それがいったん男根を啜え込めばAV女優顔負けの  
淫猥なメロディへと早変わりするのだ。  
まるで暫いのキスでもするかのような肉棒への愛撫。  
今頃、ネット上では悲喜ももごもな反応が  
飛び交っている事であるう。

ちゅぽ♡

くぱっ♡

「ふふ、これからネットに書き込まれている  
ファンたちの質問に答えて貰おうと思うが  
大丈夫か？」  
「ちゅぶ、ええ、何でも包み隠さず  
お答えします、ちゅる……」



『彼』と知り合ったきっかけは？』

『ちゅぷ、はい……通りすがりの私でシコって  
いただいたのがきっかけでした。』

私も最初はオナニーで我慢してたんですけど……  
こんな遅いチンポなのに重貞だと聞いて  
いてもたってもいられなくなって  
処女マンを奪ってもらったんです。』

『これまで何回くらいハメましたか？』

『あぁん、数年お会い出来ない時期があったので  
まだ30回くらいしかハメてないんです……』

ですからこれからもうっぱい生ハメ、膣(なご)が出し  
してもらってオマシコにこのチンポの形を  
覚えさせたいと思います、うふっ。』

ぱろっ

ちゅっ

(……ならこれはどうだ?)

『彼』との間にヤバイエピソードがあれば  
教えてください』

『そうですね……先日ようやく住んでいる場所を  
見つけたんですけど、朝まで待てなかったので  
真夜中に部屋に忍び込んでお回とおマシコで  
ゲーム直飲みさせてもらった事でしょうか……  
それと、ゴミ袋の中から精子の詰まったコンドームを  
持って帰ったりもしました……』

嬉々として常軌を逸した行為を口にする美波。  
僅かに残っていたアイドルのイメージを  
自らの手で粉々に打ち砕いた瞬間であった。



「あぁん、チンポをハメていた事を思い出していたら我慢出来なくなつて来ました……早く視聴者の皆さんに御主人様の遅しいチンポでアクメする美波を今晚に入れたいです」  
だが、美波の発言はエスカレートする一方だった。快感の連続に頭も身体も完全に緩くなつてしまったのだ。

ちゅっ

くちゅ





「ふふ、ならまずは顔にかけてやるから  
しっかり舐めてイカせるんだ」  
「はいっ、かしこまりました……」  
「ちゅぷ……じゅる、くちゅ」  
美波は先ほどより教しく舌を這わせるこ  
肉棒全体を執拗に愛撫する。  
これこそまさに「イカせる」動きであり  
手でも竿や玉袋を扱きながら  
一気に射精へと導いていくのだ。

ぐぽっ

ぐぽっ  
ぐぽっ





『はあぁん、濃いの来たあ……  
じゅるっ……ふあぶ、熱いのお……』  
こうして、噴き出す精液を浴びながら  
美波はカメラに向かってイキ顔を晒してみせる。  
そして、汚らしく精液を掬い取るこ  
口内で味わいながら飲み干していくのだ。

ドピッ

ドピュ

グッ

んんん





「それじゃあ、顔射の感想を  
ネットのみんなに教えてやるんだ」  
『うふっ、御主人様のザーメン、今日もすごく濃くて  
美味しかったです。これからはアイドルの仕事に  
追われる事なく肉便器の仕事を全う出来ると思うと  
ドキドキが止まりません。皆さんもザーメンまみれの美波で  
いっぱいシゴってけると嬉しいです  
……ああん、そろそろハメで下さいます……』  
美波は我慢出来ない様子で、そう嘆願する。

ドキ

ドキ

「そうだな、そろそろハメでやるとするか」  
俺はもはやネット上に美波を擁護する者はなく  
性欲の捌け口としてしか見られていない事を確認すると  
それでもこの女を独り占めしている高揚感に浸りながら  
新たな快感を与えてやる事にした。











































『ふふ、じゃあ入れるぞ?』  
『はい、いつでもハメてくださいませ』  
俺は美波にのし掛かると、  
彼女の方も足を腰に回し距離を詰める。  
ネット配信は続いていたが、  
もはや俺しか見えていないようだ。

はあ

はあ

きゅん

くっ





『くく、マンコは既に大洪水じゃないか』  
『あめん、だって昨日からオナニー我慢してましたし、  
御主人様のおチンポを舐めてるだけで  
おマンコ幸せになっちゃいますから……』  
美波は濡れた絨布をしきりに男根に擦りつける。  
俺はそんな蜜壺に肉棒を埋めていくのだ。

くちゅ

きゅん



「あああ、ん、しゅごい……  
チンポ来るっ……ひあめっ……」  
美波はそれだけで気をやると  
更にきつく俺の身体に絡みついた。  
「ふふ、ずいぶん簡単にイっちゃまったみたいだな」  
「だってえ……大好きなチンポでイクのは  
女として最高の悦びですからあ」  
彼女は休む間もなく腰を振ると  
更なる快感を貪るのだ。

はー  
あー

ズブッ

グジュ



「はあはあ……もっとお……  
もっともっとイかせてえ……」  
まさにおかしいよのな好色さであるう。  
「ふふ、じゃあまたイかせてやるから  
今度はカメラに向かって気持ち良さを  
アピールするんだぞ？」  
「はいいい、アピールします……だから  
いっぱいお情けくださいませえ」

ヌヂュ

ヌプツ



「はあ、はあ、ああん……チンポ深いのお」  
再び高まる絶頂の感覚に悩ましい声を上げる美波。  
俺の方も勿体ぶる理由は何処にもなかった。  
もはや今の彼女はティッシュ感覚で精液を  
ぶち撒けられる都合のいい穴でしかないのである。

ズチュ  
ズチュ  
ズチュ

ズボッ





「ほら、出すぞ！ イケっ！」  
そして俺は大量の精液を膣内へと放った。  
「はあああん、きたああ、イクゥ」  
御主人様のデカチンでイキゆう、  
みんな美波のイキ顔見てええええ……  
美波も俺をホールドしながら気をやると  
飽きる事なく肉棒の感触を味わい続ける。

ドピュ

ドムツ





あん...

はあ

はあ

『どうだ？ 気持ちよかったか？』  
『はい、とっても……私、幸せです……あふう』

（くく、そいつは良かった）

だが、彼女にはこれから更に幸せな人生が待っているのである。  
もっとも、それは少し先の話だが……

ゴポッ

ズロム





























私がアイドルを引退して1年が経ちました。  
あの日以来、御主人様は1日も欠かさず事なく

私を気持ち良くして下さいます。

ですから、私ももう少しお役に立ちたいと思い  
御主人様に貢ぐためのAVのお仕事をする事にしました。

いちおう元アイドルというのもあって

あちこちのメーカーさんからお仕事の話がありました。  
そんな中で私が選んだのは

一番高いギャラを出してくれるA社です。

話に聞くとハードな内容が売りのレーベルらしく  
ちよつと不安だったので、御主人様に相談したら  
おまじないを掛けてくれたので、  
悩みが吹き飛んじやいました！

これで撮影の方もバッチリですね。



いよいよ撮影がはじまりました。

『うふっ、美波のおっぱいどつでしようか？』  
まずは自慢のおっぱいでパイズリ奉仕です  
なんとお相手はアイドル時代に  
私のストーカーをしてきていた方だそうです

ゲームンとかいっぱい送ってくれたみたいですけど  
事務所で止められちゃって私には届かなかったんですよね……  
それに今回は撮影場所まで提供してくれたんです。  
だから、おれにいっぱいご奉仕しちやいますね





「へへ、おっぱいすごいデカくて気持ちいいぜ」  
「あん、嬉しいです」  
「でも、美波ってこんなデカパイだったっけ？」  
「うふっ、わかりますか？」  
「実は大きい方が男の人に悦んで貰えると思って  
豊胸手術を受けたんです」  
「だって、私……チンポをイカせる事が  
何よりの楽しみですから」

たがん

まじゅっ



『んじや、俺のチンポも啜えてくれや』  
『ごっちも頼むぜ』

『はい、喜んで♡』  
すぐに他の男優さんたちも加わりましたが、  
皆さんも元ファンの方だそうです  
こんな素晴らしい相手を見つけてくれた  
メーカーさんには感謝ですね

『へへ、前からこの顔に  
チンポ押しつけないかと思ってたんだ』  
『AV落ちした美波にはもったいないねえが  
特別に奉仕させてやるぜ？  
ほら、誠意を込めてしゃぶってくれや』  
お二人は私の頭を押さえつけると  
容赦なくチンポを突き付けてきます。  
このモノとして扱われてる感じが  
堪らなく気持ちいいです。

ドキ

ドキ

くちゅ

きゅぱ

じゅぱ



『ちゅぶ、ちゅばっ、ああん……』

『どっちのおチンポもすごく美味しい……』

『ふふ、すごいがつつき方、』

『美波はホントにチンポが好きなんだね』

『はい、チンポがないと』

『生きていけません……ちゅぶ』

ちゅぶ

しゅっ

しゅっ

ぬちゅ

『さすが生ハメ公開でアイドルを廃業した女は』

『一味違うな、あの男とは』

『今もハメまくってるのか？』

『いえ、あれはアレイの一種だったんです。』

『すごく素敵なチンポ持ちでしたけど』

『結婚を迫られたので別れちゃいました』



『そんなに結婚したくないのか?』

『はい、だって結婚したらいるんなチンポを  
味わえなくなっちゃうじゃないですか?』

『なら、今まで何本くらい?』

『チンポを啜えてきたんだ?』

『えっと、おマンコなら1000本くらい……』

『でしようか……お口とかおっぱいなら  
その3倍くらいになるかも知れません』

私は記憶を辿るとこれまでハメた  
チンポの本数を正直に答えました。  
軽蔑されちゃうかもしれないけど、  
常にザーメンを味わってないと  
我慢出来ない性分なんです……

ぬちゅ

くちゅ

ぐちゅ



『けっ、清纯派アイドルだと思ってた時期もあったが、ただのクソビッチだったとはな』  
『百年の恋も冷めるってもんだぜ、このメスブタがあ』  
『……ああん、ごめんなさい。お詫びに……これからも皆様のお好きなお時間にチンポ穴になりますから公衆便所として使って欲しいですう……くちゅ……ちゅぷ……』

はあはあ……罵倒されるの素敵……自分を貶めるのも気持ちいい……あぁ、もっとなを蔑んでえ……

ゾク

ゾク

ちゅぱ

きゅぽ

ぬちゅ



『そうだなあ、じゃあ肉便器の証として俺らのチンポを讀えてくれよ』

『はい、もちろんです』

『あん、こちらのチンポは固くて浮き出てる血管が堪らなくいやらしいです女としてこんなチンポをしやぶる事が出来てとっても幸せですわ』

『マンコもとっても太くて、この高いカリ首を舐めているだけでおマンコが濡れてきちゃいます』

『そして、私のデカパイでも包みきれないストーカーさんの巨チン……メロメロです……ますますおマンコが疼いて来ちゃいました早くハメてもらわないとおかしくなっちゃう……』

きゅん

しゅる

ぬちゅ



「ちゅば、ああん……  
遠慮しないでお口やおっぱいに  
ザーメンぶち撒けていただければ嬉しいです  
零れたのも全部舐め取りますからあ……  
ちゅぶ、ちゅぼ……」  
あん、チンポの感触に包まれて私幸せ……

「ちゅぶ、じゅる、ちゅぼっ、ちゅる……」  
どのおチンポもとっても嬉しい。  
その先から出る濃いミルク早く飲みたいよあ。  
「ああん、おチンポピクピクしてるっ……  
遠慮しないで美波の顔に  
ぶっかけてくださいませえ……ちゅるっ」

ぬちゅ

くちゅ

きゅん







その時、監督さんから声が掛かりました。  
『よくし、カメラに向かって言っんだ  
チンポさえあれば他に何もいりません  
今回の撮影のギャラは辞退します、ってな』

……ああん、そんな……

……えの？

でも、私……何のために  
ビデオに出ようとしたんだっけ……？

『ほら、さっさとしないと  
ここで撮影終了するぞ？』

『ああん、いいですよ、  
チンポさえあれば他に何も入りません  
今回……いえ、ずっとノーギャラでいいので  
いっぱいビデオのお仕事下さい』

そうよね、私……こうしてるだけで幸せだから  
細かい事、気にしてもしょうがないよね

くちゅ

ぎゅ



次はいよいよ本番ですが、  
ヤラセなしで妊娠させる企画みたいで、ちよつと楽しみです。  
だって、ほら、パパが誰かわからない赤ちゃんを  
産むなんてちよつと興奮しちゃいますよね。

『うふっ、今日は危険日なので  
遠慮なく産出して受精させて欲しいです。  
もちろん、お尻の穴もご自由に使ってくださいね』

きん

『くく、元アイドルとは思えないグロマンだな』  
『あくん、そう言われると恥ずかしい……  
でも、チンポ大好きなので許して欲しいです  
あ、でも締まりには自信ありますよ』  
その間にもおマンコぱっちり撮られてます  
無修正版も流失予定みたいだから  
昔の事務所のみんなにも見られちゃうかも……  
うふふ、そう考えたらおマンコ疼いてきちゃいます



『はあはあ、太いの入ってきたあ……  
ああん、お尻にも来るっ』

『ふふふ、二穴責めは嫌いかな？』

『いえ、とっても大好きです、』

中で擦れ合う感覚が堪らないのぉ』

あん、待ちきれないわあ、えいっ、私から動いちゃえ

あんっ

ヌプッ

グプ



『へへ、こいつ自分から腰振りはじめたぜ』  
『ふーふー、あぁん、いいのお……』  
『おまんこ薄けちやうう、お子様産ませてえ……』  
『お腹の中が満たされた感じが堪りません。』

こい

グ  
チュ  
ヌ  
チュ  
グ  
ポッ

『くく、とんだビッチだな、  
元ファンたちに謝罪した方がいんじゃないか？』  
『あぁん、はい、美波はほんなにエッチな  
AV女優になって本当にごめんなさい、  
でも、いっぱいシコって貰えると嬉しいな』  
『あぁん、興奮が止まらないのお……』  
『気持ちいい……おまんこ締まるう』



『はぁぁん、おチンポ奥まで届いてますっ、  
この感触……最高ののお』

お二人のチンポが中で擦れ合って暴れてますっ

ズ  
チ  
ュ

ズ  
ビ  
ュ

キ  
ュ  
プ

『あぁん、腰が止まらない……  
早く精液ちようだい……  
いっぱい出して妊娠させてえ……』



『よし、出すぞー！ きっちり俺のガキを孕めよ』  
『俺もケツに出してやるぞー』  
『あああん、しゅごい！ 同時に来たあ  
いっばい出てりゅ、お、おマジコ、イクう!!!』  
『アクメ止まらない……ああん、これ妊娠した  
絶対に妊娠したからあ。』

『はあはあ、まだ出てりゅ……  
ま、また……い、イクう……』



ド  
プ  
ツ

ド  
ク  
ツ

ド  
ク  
ツ





『はあ……はあ……はあ』

『ほら、休んでる暇はないぞ？  
父親候補はあと20人いるんだから  
ノンストップで行くぞ？』

『は、はい』

うふっ、まだまだチンポを味わえると思うと  
興奮が止まりません。

美波、頑張ります！

ほあ  
ほあ

おわり

ヌポッ

ニポッ

ミロム